B—164 東北地方の刺しものの研究 （第6報）

山形県内陸地方の刺しおむつとえづこについて

県立米沢女短大 徳永幾久

目的 棉花の育たない寒冷地の東北では布の命を長らえることは 生業に匹敵する技術であった。度重なる凶作と過酷な供作にあえぐ農民は 米と交換の古着に尺貫小の布子を当て刺し子として着た。このような状況の中で赤子の必需品であるおむつはどうであったか。もともとおむつの語源は產衣であるから勿論古手布ぼろを刺してを赤子を包み またはえづこ（いづめ）に入れて 人間界に取上げられたことを祝うと共に 保育用揺籠に兼ねて排泄物の処理に利用した。本報では山形県内陸地方の襁褓の実態とえづこの充填材料と床作りについて考察し、刺しおむつの周辺を探べる。

方法 県内一円のアンケート調査と採訪調査による結果から考察した。

結果 襁褓の実態は 明治大正期は殆んど二枚重ね縫いで 中にぼろ布を入れたものが多く 縦横の縫い刺しや 青海波 麻の葉 渦 十字の刺し縫を入れ 3枚用意し1日3回取りかえる。戦中は一日1～2枚とし 中にぼろの代りに木灰を入れた。これらには 紐を付け褌状に着用した。戦後は輪縫も流行したが農村では相変らず重ね刺しであり、襁褓の枚数の不足は自然えづこの利用となり えづこの床作りも工面した。ござ 木灰 くたび えぐさを基調とし 糠 干草 わかめ 古新聞 杉葉など手近なものを順よく重ね、はだにふれる所には1枚の刺し襁褓が敷かれた。この1枚の刺し襁褓とえづこの床は 数枚の襁褓の機能が要求され工面された。この1枚の刺しおむつとえづこの床作りは 赤子のために 女たちが貧困の中で考えた必需品であり、被服管理の傑作と考えられる手段であったのである。